

Marx-Engels-Gesamtausgabe (MEGA). I. Abt., Bd. 5:

Karl Marx / Friedrich Engels: Deutsche Ideologie. Manuskripte und Drucke.

Bearbeitet von Ulrich Pagel, Gerald Hubmann und Christine Weckwerth.

Herausgegeben von der Internationalen Marx-Engels-Stiftung (IMES) Amsterdam. Berlin /

Boston: De Gruyter Akademie Forschung 2017. 2 Bde. XII, 1894 Seiten, 52 Abb.219 Euro.

ISBN 978-3-11-048577-6.

国家マルクス主義で規範となった見解は次のようであった（ある）。マルクス/エンゲルスは、『ドイツ・イデオロギー』において歴史的唯物論を仕上げたのであり、同時にこの偉大な作品においてマルクス主義とマルクス主義政党の哲学的及び理論的基盤を生み出した^{注1)}。歴史的唯物論の基本原理は、とりわけルートヴィヒ・フォイエルバッハの批判のなかで発展させられた。

注1) 事例を挙げると、この立場は、例えば、モスクワ及びベルリンの[旧一訳者]マルクス=レーニン主義研究所によって編集され、これまで広範囲に普及した『ドイツ・イデオロギー』を収録する『マルクス=エンゲルス著作集』第3巻[邦訳大月書店版『マルクス=エンゲルス全集』第3巻一訳者]の序文において定式化されている

しかし、マルクス/エンゲルスは、この基本的だと誤認された作品の出版を断念していた。初公開をめぐるドイツと旧ソ連との競争があった後、ようやく、1930年代以来、様々な版本が出回るようになった。この間、第1章「フォイエルバッハ」だけでも、1ダース近くの版が出現した。版ごとに異なる理由は、何よりも、完結した作品である『ドイツ・イデオロギー』が存在しないことにある。そもそも完結した合冊の手稿というものが存在するのではなく、伝承されているのは、専ら断片的で既にマルクス/エンゲルスの存命中に所々——それもネズミの被害に遭って、有名な成句として「ネズミどもがかじる批判」(マルクス)というのがある——激しく痛んだ草稿であった。そもそも手稿中には『ドイツ・イデオロギー』というタイトルはどこにも見られないのだが、これらの諸々の草稿が、従来の編集では、それぞれの編集者によるテキスト合成によって、『ドイツ・イデオロギー』という一つの作品に集成されたのであった。そのさい、様々な編者がマルクス/エンゲルスによる「歴史的唯物論」の骨格を再構成しようとして6つの独立した草稿から1つの章、「I.フォイエルバッハ」を構成しようとしたことが、とりわけ記憶に止められる諸々の帰結を生んだ。しかし、この「歴史的唯物論」という概念もまた『ドイツ・イデオロギー』の手稿には存在しないのである。

さて、新MEGA第1部門第5巻では、総計17の手稿と2つの印刷物から成る『ドイツ・イデオロギー』という複合体が初めて完全に歴史的批判的形式で編集された。この信頼できるテキスト再現 — これには約500頁に達するテキスト異文も含まれる — と並んで、諸々の草稿の複雑なテキスト相互の関連や成立史、そして伝承史、およびマルクス/エンゲルス

による同時期の草稿公表の試みが包括的に記されている。これによって新 MEGA 本巻は、唯物論的歴史観の生成階梯研究への全く新たな地平を切り開く。

マルクス/エンゲルスが「ドイツのイデオロギー」のための草稿群を、書籍という枠組みにおいてでは全くなく、むしろ、マルクス/エンゲルス以外の著者（モーゼス・ヘス、ゲオルク・ヴェールト、ヴィリヘルム・ヴァイトリンクほか）も関与する1つの雑誌プロジェクトの枠組みで、起草していたことも明らかにすることができた。この理由から、本巻には、ローラント・ダニエルスが起草し、マルクス/エンゲルスによって企画された四季報のために編集された草稿が復刻印刷される。内容的な観点に鑑みると、第1の眼目は、独自の理論的立場を体系的に仕上げるのではなく、その代わりに、青年ヘーゲル派及び社会主義的同時代人と論争的に展開された議論にある。しかしながらその際、マルクス/エンゲルスの批判の焦点にあったのは、（従来信じられていた）フォイエルバッハではなく、マックス・シュティルナー、すなわちラジカルな個人主義的著作、『唯一者とその所有』の著者であった。過去一世紀の読者に「I.フォイエルバッハ」章として提示されていた草稿の大半は、元々はシュティルナー批判の中で執筆されたことを明らかにすることができた。このことは、「イデオロギー」や「小ブルジョア」などの中心的な諸概念の誕生にも当てはまる。さらに、ここには（ドイツのブルジョア制度や物質的支配に対する精神的支配の諸関係、及び私有財産制度の歴史の発展に関する）マルクス/エンゲルスが彼ら独自の立場を表明する多数の脱線も見られる。こうした批判をする中で初めてマルクス/エンゲルスは、彼らの見解を1つの独自の章の中で表明し、フォイエルバッハへの批判に結びつけることを決断したのであった。このために、二人は彼らが起草したテキストから、シュティルナーやバウアー批判の中心的なテキストを分離することにしたのであった。本巻では、こうしたテキストの発展が学術附属資料部で詳細に記録されている。テキスト批判の学術アпарат部で、論証的異文提示がなされており、これによって草稿の作成過程が明瞭となり、とりわけ諸々の草稿に対するマルクス/エンゲルスの集中的な共同作業も克明に跡づけることが可能となろう。

新 MEGA 第 I 部門第 5 巻では、初めて、度重なる出版上の調整が徹底的に見直された。諸々の草稿は、この調整の範囲内で公刊されることになっていた。最初に企画された季刊誌での公表の挫折後、マルクス/エンゲルスは、1847 年晩夏まで、2 巻本あるいは 1 巻本の別冊出版実現を模索したが、これは水泡に帰した。学術附属資料部は、諸草稿執筆の時期的経緯や関連する異文情報の記録と共に、個々の草稿の作業の時間的経過を提供しているので、読者が、ある草稿から他の草稿への — 場合によれば同一草稿内部の — 彼らの立ち位置の発展や正確な位置づけを究明することを初めて可能にする。解説的なコメントは、最終的に、とりわけ、マルクス/エンゲルスが草稿の執筆途上、どこで彼らの抜粋帳の諸資料に立ち戻ったのかを、また例えば彼らの国民経済学上の研究成果を、どこで青年ヘーゲル派や社会主義者の同時代人の批判に組み込んだのかを、明らかにする。

20 世紀の政治史を背景に、如何にして、未完の、マルクス/エンゲルスの存命中には未公表であった諸々の草稿から、「歴史的唯物論」の一つの基本文献が編み出され得たのか、ということの説明する、草稿の伝承史や編集史によって、テキスト批判の総括及びコメントは十全なものとなっている。文献学的研究の成果の中で初めてマルクス/エンゲルスの歴史観

の生成及び信頼できるテキスト形成史への完璧な洞察が可能となり、彼らの歴史観が、天才の理論形成の成果ではなく、3月前期の青年ヘーゲル派や初期社会主義者との論争から生まれたことが明らかとなる。草稿が証拠立てるのは、後々の受容で喧伝された（およびテキスト編集で示唆された）歴史的唯物論という1つの哲学を仕上げるのではなく、それに代わって、まさしく「現実的で実証的な科学」のための、この哲学からの明白な決別宣言である。

文責

Dr. Gerald Hubmann(ゲラルト・フープマン)

Berlin-Brandenburgische Akademie der Wissenschaften

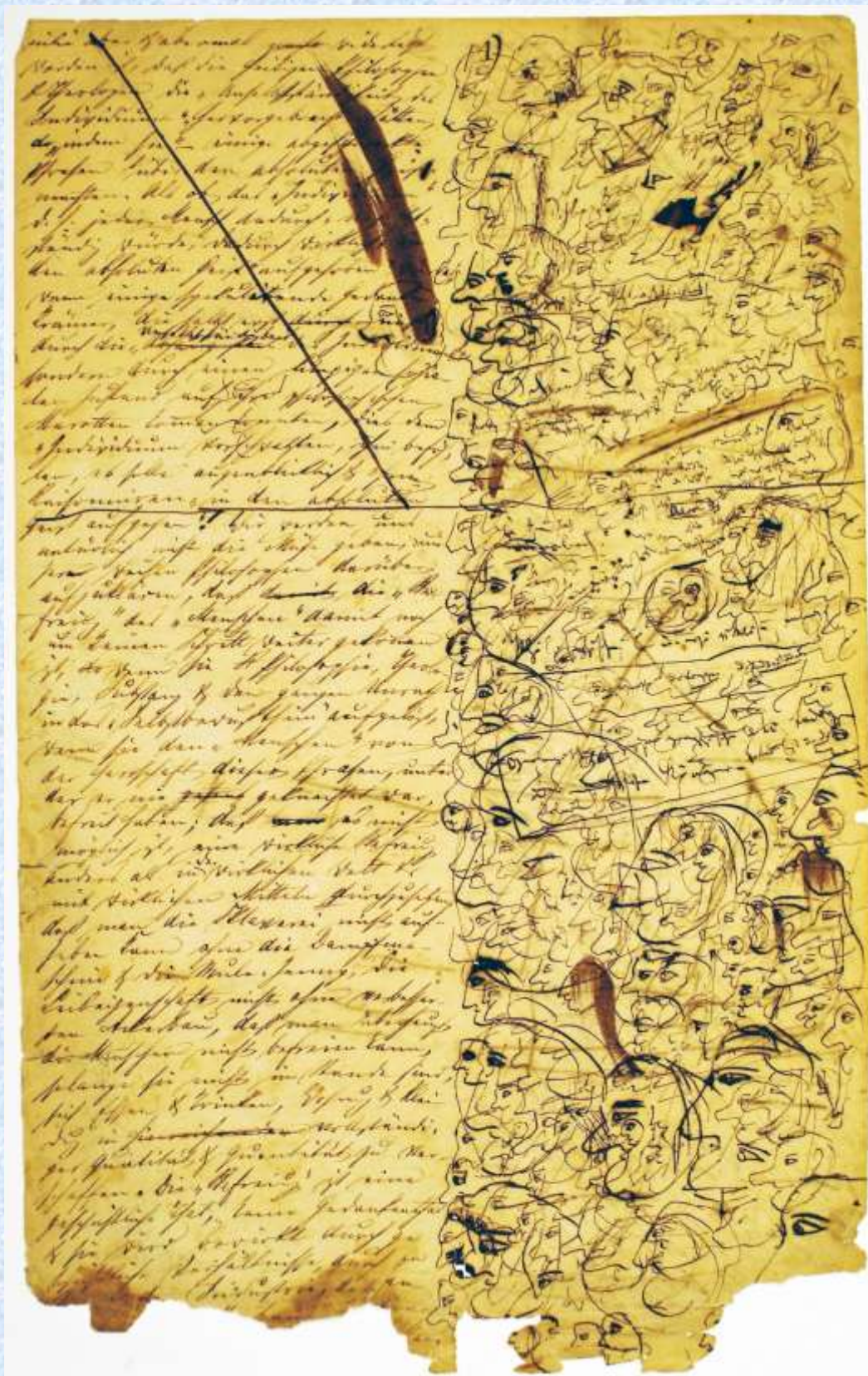
hubmann@bbaw.de

大村泉（東北大学名誉教授）＋窪俊一（東北大学准教授）訳

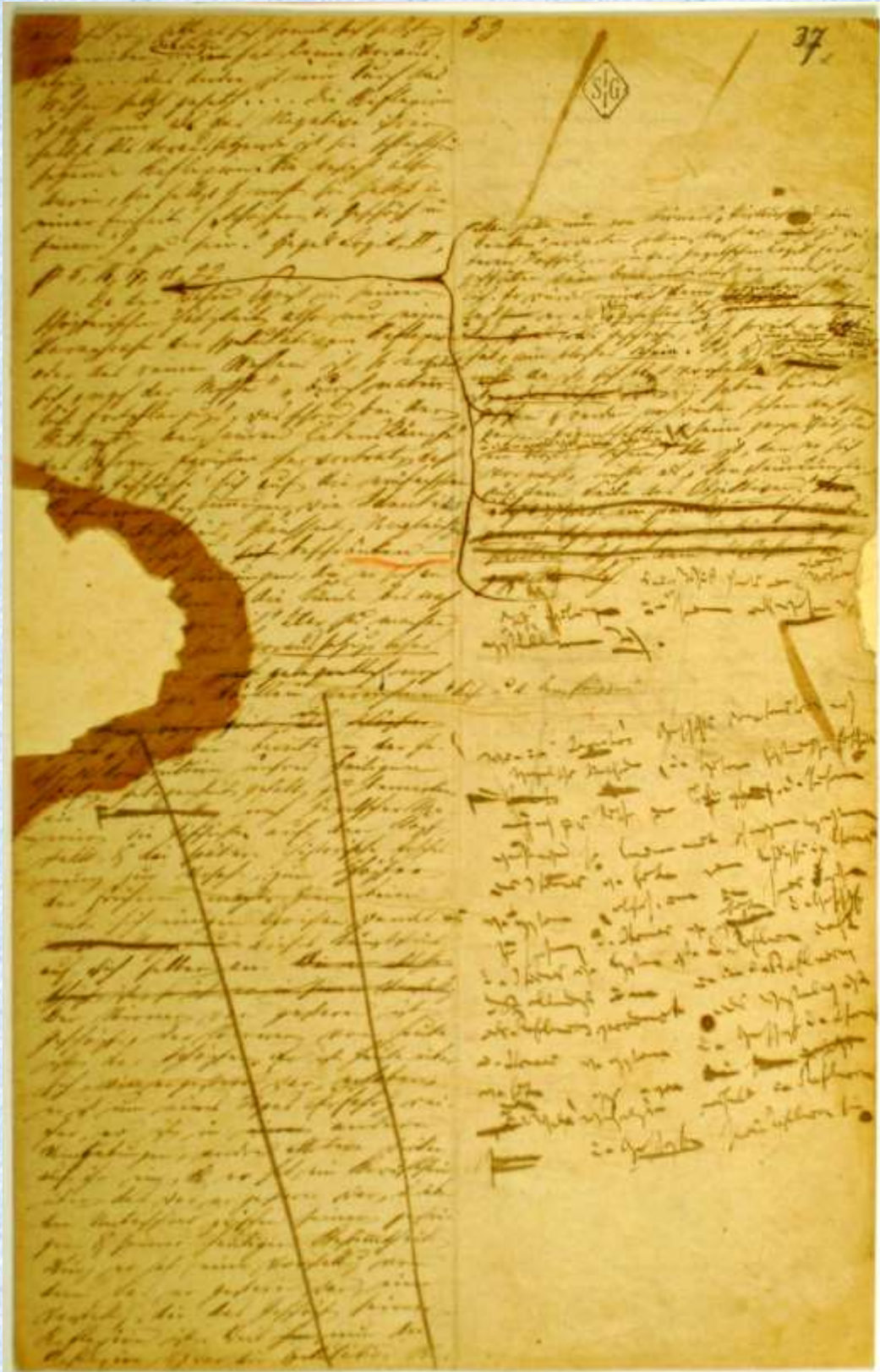
訳注

※「国家マルクス主義」（Staatsmarxismus）（本文第1行）：ここでは、フープマン氏は、公認されたマルクス主義の国家論を念頭に置いている、という。

※※「現実的で実証的な科学」（Die wirkliche positive Wissenschaft）：この引用は、新MEGA本巻第1章「フォイエルバッハ」末尾に置かれた「マルクス/エンゲルス：5[断片]」、最終段落冒頭の次の一節から取られている（引用に際し、「，」が省略されている）。「したがって、思弁がやむときに、すなわち現実的生活においては、現実的で実証的な科学が、人間たちの実践的活動、実践的發展過程の叙述がはじまる。」（Da wo die Spekulation aufhört, beim wirklichen Leben, beginnt also die wirkliche, positive Wissenschaft, die Darstellung der praktischen Bethätigung, des praktischen Entwicklungsprozesses der Menschen.）（新MEGA第I部門第5巻，136頁，28-30行。訳文は、服部文男監訳『ドイツ・イデオロギー』，新日本出版社，1998年，28頁）



フョイエルバッハ手稿束 (H⁵, Ms-S.1) : 左欄はエンゲルス。右欄イラスト下はマルクス。頁の冒頭に書きなぐられたテキストも最初の文脈はブルーノ・パウアーの批判であった (新MEGA 第I部門第5巻 833-837頁, 及び 831-844頁, また H⁵に関する頁付け図面, 参照。写真©IISG・Amsterdam



III 聖マックス (H¹¹, Ms-S.53) : 基底稿はエンゲルス。エンゲルス及びマルクスによる集中的推敲の痕跡。手稿欠損はネズミによる。赤鉛筆及び右上部の頁付けは E.ベルンシュタイン。(写真は新 MEGA 第 I 部門第 5 巻 S.729.テキストは S.322,325, 異文は S.1184-1186, 参照)。写真©IISG・Amsterdam